

エピソード

公園から帰り、階段を上がってリビングのドアを開けると、アーサー・ホームズの帰宅を待っていた者たちが、一斉に顔を向けた。

コナン・ワトソン。ハドソン家の三姉妹。夏目銀助。それに、クラウド・レストレードもいる。

ニヤア、とワガハイまで声を上げた。

「ちょっと、どこに行つてたのよ、アーサー君。……ん？ 何それ、灰皿？ そんなの持つて、ほんとにどこ行つてたの？」

「みんな、アーサーさんが帰って来るのを待つてたんですよ？」

「あのね、アーサーくん！ いまリージェンツ・パークで、お祭りをやつてるの！ いっぱい人が集まつてるんだつて。これからみんなで、見に行きましょう」

マリー・ハドソン、ターナ・ハドソン、そしてサラ・ハドソンが口々に言った。アーサーは盛大に顔をしかめる。

「はあ？ なんで僕が祭りなんかに行かなきゃならないんだ。僕が人混みを憎んでることは、みんなだつて知つてるだろ？」

「まあそう言うなよ、アーサー。実はまた、相談したい事件があつてな？」

「ちょうどアーサー君も外出着を着てることですし、このまま出ちゃいましょう」

「さんせい」

「じゃあ、作つておいたサンドイッチを持ってきますね」

「せつかくだから、ワガハイも連れてつてあげようよ！ ローラちゃんとベリルさんも来るつて言つてたし！」

「いや、待て！ 待つんだ！ 誰か一人ぐらい、まともに話を聞いたらどうだ？ なんてそうなる？ おい、コナン？ これは一体どういうー」

「悪いな、アーサー。この前心配をかけたペナルティーで、俺には当分、拒否権はないんだ」
「それ、僕は関係ないだろ！？」

アーサーは激しく抗議したが、気に止める者は一人もいなかった。一同は賑々しくリビングを出ると、さつきアーサーが上がってきたばかりの階段を、ドタドタと騒がしく降りた。

玄関から外に出る。暖かな陽気に包まれる。
そこに、

「あら。ご機嫌よう、皆さん」

ちやうど隣から出て来た女性が、アーサーたちに弾むような声で挨拶をした。

アーサーとコナン、銀助が借りているベーカー街222番地の隣は、ハドソン家の住まいだ。その二階に住んでいる女性である。

ベーカー街221Bの住人だった。

ターナが嬉しそうに微笑み、

「ギギさん。なんだか久しぶりですね。お加減はいかがですか？」

「うん。楽しんでるよ。とても楽しんでる。ここは飽きないね。観測しがいがあるよ」

「まあ。それは良かった」

「みんなはこれから、近くでやってるお祭りかな？」

「うん！ ギギお姉ちゃんも来る？」

「ありがとう。でも、遠慮するよ。みんなで楽しんでおいで」

そう言つて、ギギは笑いながら、ベーカー街を歩いて行った。

その背中を、アーサーはなぜか不思議な面持ちで、いつまでも見つめていた。

コナンが気付き、「アーサー？」と声をかける。

「どうした？ 何か気になることでも？」

「……いや。何か……」

アーサーは、自分でも戸惑うような声で答える。

それから、息を吐き、首を振った。

「なんでもない。行くか。もう、諦めたよ」

アーサーが諦念を口にすると、コナンは苦笑しながら「ああ」と頷く。

「行こう、相棒。多分だけどー今日はきつと、平和さ」

f i n .